

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

運を育てよう

ビジネスシーンで勝てるマニュアル

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

1	運を育てる 墓参り	3
2	私には夢がある	6
3	砂の城と神います -神仏を感じる時-.....	7
3.1	私のせい、の砂の城.....	7
3.2	神います.....	9
3.3	錦繡（神様の恵みを感じる作品）	11
4	化けて出ない生き方をする	13
4.1	人生で確かなこと.....	13
4.2	化けて出るとのこと.....	15

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

1 運を育てる 墓参り

米長邦雄 永世棋聖の書かれた「運を育てる」（祥伝社）は私が何度か読み返した良書である。日本人のビジネスマンの中で私の最も尊敬する人から薦められて、読んだ本である。

将棋のような勝負の世界は実力の差もさることながら運に左右されることが多い。いかにして運を良くするか、どうすれば勝利の女神に好かれるか、その秘訣が書かれている。

お弟子さんの一人がプロになれるか否か瀬戸際であったとき、米長氏の与えたアドバイスがこれである。

お父さんの墓参りに行け、花も何ももって行かなくていい、ただ墓前で手を合わせお父さんと話して来い。

そしてこのアドバイスを忠実に実行した彼は見事勝負に勝つことができたのである。

なぜこれを書くのか？それは、私も同様のご利益を得たからである。

会社を辞めようと決意して退職願を提出したとき、その先の方向性は決めていた。けれども当時私は病気を患っており、勉強を続けねばならず、自分の運を信じたい時期だった。運を育てようと続けていた努力が、果たしてあっていることだったのか、確信が必要だった。困って窮していたわけではないが、神頼み的な要素があったことは否めない。

両親は健在であるので、かつて自分をとて可愛がってくれた人の墓を訪れようと思った。

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

「モノゴコロついたときから」とは良く使う表現である。不思議なことに私はこの、モノゴコロついた瞬間を覚えている。自分の記憶を辿ってみると、これより昔の記憶はないという瞬間である。自分の着ていたものと家財道具の配置などから、なんども振り返って考察するに、どう考えてもこれ以前の記憶はないという瞬間を私はおぼえている。

家には「ばあちゃん」が二人居た。一人はおじいちゃんの後妻であり、一人はおじいちゃんの姉さんである。このおじいちゃんの姉さんは「なんばあちゃん」と呼ばれていた。茅ヶ崎に南郷という土地があり、そこに住んでいたのだから「なんばあちゃん」なのだと後から知った。

なんばあちゃんはイタリアのマンマのように気持ちよく太っていて、気前も良く、度胸もあった。三女の私を「ユキが男だったら三男の三郎で、一番賢いだよ・・・」と褒めてくれたのもこの人である。

両親が店で働いていたので、私の面倒はこの「なんばあちゃん」が見てくれた。クレヨンで上手く使って絵を描いたり、とかく洋風のを進んで受け入れた人のようである。

原色を使った布団のあまり布でリカちゃん人形の帯を作ってくれたりした。着物をつくるだけの布がなかったのか、それともスキルがなかったのか、はたまたエネルギーがなかったのか、いつも私のリカちゃんは裸に帯だけを巻いていたような気がする。現代のイタリアンテイストから考えても十分いけそうな、ぶっとんだ（アバンギャルド）スタイルの太帯ファッションだった。

スープをソップと呼び、しょっちゅう作っては私に食べさせてくれていた。最も古い記憶の中では、この「なんばあちゃん」が私に人参をすりつぶして食べさせてくれている。そのときの漆のお椀も、人参と混ざり合ったシチューのスープの色も、ハッキリと覚えている。

私の最初のメモリーに刻まれたこの「なんばあちゃん」に会いに行こうと思ったのは、去年の5月だった。南郷の家からかなり離れたところにお寺があるという。探し当てて行ったお寺は、地元で古くからあるようで、立派な伽藍と丁寧に手入れされた庭を

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

持っていた。ばあちゃんはこの境内ではなく、隣の共同墓地に眠っていた。同じ苗字の墓があちこちに無造作に並んでいる。父親の手書きの地図はなんとも心元なかった。

この墓地をさまよい歩くこと30分、やっと墓誌に「なんばあちゃん」の名前を見つけた。他の墓に囲まれるようにして墓石が立っており、墓前に行くのに他家の墓をまたいだ。夜だったら絶対に居られないような光景である。花と線香を供え、しばし目を閉じた。

米長さんは名人位をとる前に、鑑真和尚と対話したと著書に書かれていた。目を閉じても「なんばあちゃん」との会話はできなかった。けれども、ばあちゃんが、にんじんをすりつぶすのに使ったスプーンの色が青だったこと、そのとき自分が白いタイツをはいていたことをつらつらと思い出した。

去年は甲状腺の調子が良くないといわれ、度々動悸が激しくなる経験もしたが、なんばあちゃんの墓の前では木々のざわめきが聞こえ、気持ちが落ち着き、深く呼吸をしていたのを覚えている。雲が動き、雨がぱらぱら降り始めるまで墓の前に立っていたような気がする。

この墓参りが、さほど自分に大きな影響を与えたとはそのときには思えなかった。けれどもその2ヵ月後に、私は絶対にダメだと思っていた大学院から合格通知を受け、一番住みたいと思っていた地で生活を始めることができた。

自分が愛された記憶をたどり、愛情を注いでもらった記憶を呼び起こすことが大切だったのだと今になるとわかる。

おそらく、仏教でいう「内観」に似た働きを自分にもたらしたようである。

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

2 私には夢がある

何度か書いているかもしれないが、私はオペラファンである。歌は歌えないし、楽器も弾けない。ピアノで「猫ふんじゃった」をひける人を実は秘かに尊敬している。

こんな「ど素人」の私でも、オペラは無条件に楽しい。

作曲家論、オペラ物語は別に語るとして、今は大好きなカレーラスのことを考えている。ここ NY 州の片田舎、イサカという街に流れつた。エスラー大学の MBA へ交換留学するためである。

男ばかり 5 人も住んでいるアパートに放り込まれ、自分のこれから暮らす環境に 0.001 秒ほど驚いたが、これも私のいつものパターン、優しい人々に囲まれ、いろいろ面倒見てもらっている。

ついた早々、イタリアンの晚餐を開催させていただいた。食材は何とかなっても、男所帯、食器、テーブルクロスなど細々したものは全くと言っていいほど、整っていない。せめて BGM だけでも・・・と思い、学校の購買でカレーラスの CD を買った。

「I have a dream 私には夢がある」これが私が最初に聞いたカレーラスの歌である。静かなシンフォニーから、カレーラスの声が響きだす。不思議なことに、実におどろいたことに、カレーラスの声を聞いた途端、涙が溢れ出した。

カレーラスという人物については、全く知らなかったのに、その深い声を聞いただけで、涙が溢れてあふれて、止まらなかった。いわゆる、「こぶし」をきかせて、泣かせるようにうたっているのではない。オペラのアリアのように、感情がほとぼしるようにして、聞かせているのではない。ただ、淡々と「私には夢がある」と歌っているのである。

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

ちあきなおみの「喝采」のように、メロディーの素晴らしさと歌詞、感情の押さえ加減が絶妙なので、「これでもかー！！」と歌った歌よりも、逆に、より心に響く効果が高いのである。

何度か繰り返し、「私には夢がある」を聞き、解説を読んだ。

テノール歌手、ホセ・カレーラスは、オペラ歌手として絶頂期に白血病で倒れる。手術、放射線治療と過酷な戦いが始まった・・・「ラ・ボエーム」の Aria を頭の中で歌い、再び舞台に立つ自分をイメージしてリハビリに集中したという。

パンフレットに載っている、カレーラスの写真、その目は、苦勞をみじんも感じさせないほど穏やかであった。この曲はすべて英語なので、英語ができない時期の苦勞話も書かれていた。

NY の最初の週末、「なぜかイタリアン」のタベでかけた CD は、期せずして、このカレーラスが歌った「ラ・ボエーム」であった。

99%無理だといわれることでも、奇跡の可能性はある。敗者復活が可能な国、これがアメリカである。頭のなかに、常にカレーラスの声をイメージして、堂々と自分の思うことを話せばいい。たとえそれが、つたない英語であっても。

明日はプレゼン、このカレーラス効果をどれほど期待できるだろうか・・・？

3 砂の城と神います -神仏を感じるとき-

3.1 私のせい、の砂の城

日本の漫画は、世界で最もレベルが高いといわれる。

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

私もこれにはトータルアグリーである。思うに、より高い性能を求めがちな日本人の気質が、緻密な絵と、ストーリー、その絶妙なコンビネーションを作り出すような気がする。

私のイタリア語の先生は「鉄腕アトム」の手帳を使っていた。このアストロボーイを子供のときから見ていたという。イタリア人の親友パオラも、例にもれず漫画オタクであった。

手塚治虫の偉大さまた別の機会に語るとして、今は、私がここイサカの病床で読んだ「砂の城」について書く。

一条ゆかりさんの漫画は昔から読んでいた。シスターメアリーとその上にいる姉の影響を受けて、小さい頃から漫画は片っ端から読んでいた。

砂の城はベストセラーであったこともあり、ここ数年はやりの、文庫版のリバイバルシリーズにも早々に登場した。私が始めて通しで読んだのも97年であったような気がする。

その時も「親知らず」を抜歯し、一日寝ていることを余儀なくされたので、普段は読む暇が無かった漫画をここぞとばかりに通しで読んだ。

甚だ余談だが、転勤とドサ周りが多かったので、名古屋、浜松、西新宿でそれぞれ「親知らず」を抜歯した。これはこれで貴重な体験だった。

8年前に読んだ「砂の城」は、よくできたドラマの印象だった。

今になって、フランスのカルチャーを良く理解して、再び読み返すと、実に良くフランス人というものを描き出しているのである。

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

ラテンの国はカソリックの影響が強い、というよりカソリック抜きには考えられない。したがって階級は所与として受け入れるべき運命である。貧富の差、権威主義が強くなると社会の進歩・発展がなくなる。

3.2 神います

忙しく働かなくて済むぶん、空いた時間を恋愛などに費やしたりする。単純な、どうでもいいことであっても、誰が誰を愛したとか、色恋で人生を狂わせたとか、そんなことに時間とエネルギーがさけるようになってくる。

ストレートフォワードに行くような気もすることを、グダグダ考えて悩んで大方の人生を送る、真剣にフランスを愛している人には甚だ申し訳ないが、これがおフランス的カルチャーと言えなくも無い。

イタリア人はこずるいので、色恋に時間とエネルギーを割いても、もっと即物的である。そしてより、個人主義的な要素も強くなる。

話を砂の城に戻すと、この主題は、私が人を不幸にした、あの人の人生を狂わせたのは自分だ、ということに尽きる。

これは逆の見方もあり、私の人生はあの人に狂わされた、自分が今不幸なのは、彼、彼女のせいだ、という考えで人生を送っている人もいる。

今でこそ、これはどうでもいい悩みといえるが、日本人のように他人との関係が協調されるカルチャーでは、意外にもフィットする悩みである。ちょうど「ノルウエーの森」などの小説が、平和でリベラルな次代の若者に、あえて「悩み」を売ったのと似ている。

以前も書いたかもしれないが、名古屋時代の上司のカラオケの十八番は「五番街のマリー」であった。その昔、暮らした女性に悲しい思いをさせた、今はそれだけが気がかり、どうか今が幸せかどうか、確かめたいという内容である。

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

かの上司が酔っ払うたんに、私をご氏名で、この曲を歌えとリクエストされたので、イヤでも歌詞は覚えてしまった。もっとも、地方で権力のある人だったので、実際、何人マリーがいるのか私の知るところではないが。

長く生きればそれだけ人を傷つけることも、傷つけられることも多くなる、ただそれだけのような気がする。

さて、ここで、「神います」である。

川端靖成はいくつか読んでいるが、「掌の小説」という短編集の一節である。

峠の湯治場で、主人公の男がある夫婦に会う。鳥屋がもらった、親子ほど歳の離れた若い女房、彼女は手足が不自由であった。

鳥屋の少女に対する愛情は噂以上であった。ノーベル文学賞の描写力が冴えるシーンである。

世間話をしながら、主人公の男はこの夫婦の信頼関係の強さを感じる、そして気づく。・・・あの少女だと。

数年前、自分が怪我をさせ、体の自由を奪った、あの少女であったと。

湯舟に身を隠す男の動揺など気にも留めず、鳥屋は女房を抱きかかえ、すたすたとその場を去っていく。

主人公の男は、ぼたぼたと大粒の涙をこぼす。そして、つぶやく「神います」と。

鳥屋も女房も十分幸せなのである。娘は安心してこの男に身を任せ、鳥屋も愛おしいとしか表現のしようがないほど、相手を愛しんでいる。

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

事故が無ければ、もっと幸せであった等という仮定は二人の眼中にないのである。

自分が人を不幸にしたなどという考えは奢りであったと、傷つけたが故に高みにあるものが、傷つけられた者を下に置き、憐れむ等ということは愚かな考えであると。人は他人を不幸にすること等はできない、それ自体が傲慢な考えであると男は悟るのである。

男は最後にこうつぶやく、「神よ、我は御身に負けた。」

私のキャラクターゆえ、ポップな文体ではなはだ申し訳ないが、実は言いたい内容は結構シリアスである。

人生そのものを変えるかもしれないほど、重要な認識だとあえて言いたい。

自分を幸せにするも、不幸にするも自分であり、自分以外のものは本当はそんなことできないのである。

自分をいたわろうという信念も、他人の心づくしが身にしみるのも、すべてはこの認識からではないかと、病気になったお陰で思い出した。

3.3 錦繡（神様の恵みを感じる作品）

イサカはいきなり秋になった。

巨大、といゆう表現がしっくりくるメープルの葉がビビットな赤になった。おそらく今が雨季なのだろう。ミッドタームの試験期間は雨が多くふる。

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

相変わらず、やることは山ほどあるけれども、体の無理がたたったのか、試験休みに入った途端、寝込んでしまった。

アメリカのカルチャーに染まろうとすると、寝る暇もなくなる。

寝込んだおかげでいろいろ考えることができた。何度かブログにも書いたが、「メイドインジャパン」を読み返し、以前は理解できなかった概念が実感としてわかるようにもなってきた。

そして今は「遠きにある故郷」を思い出している。おそらくこれからは最も紅葉が美しい時期ではないか。

私が日本に帰りたくなるのは、一年で二回、桜の時期と、紅葉の秋である。

さて、紅葉といえば、お勧めの一作を挙げておく。

宮本輝の「錦繡」である。おすぎかピーコか、どっちかわからないけれども絶賛していた。私が読んだきっかけは、京都、山崎を親友と訪れた際に、彼女が勧めてくれたからであった。当時立ち寄った、山崎の大河内山荘は、まさに「錦繡」としか言いようがないほど見事な紅葉であった。

この小説はすべて書簡である。21世紀の今になって再び流行しているのは手紙、メールであるが、かつては廃れたコミュニケーションツールであった。

蔵王の紅葉が美しいケーブルカーの中で、子供をつれた女性が、ある男性に会う。その男性はかつての自分の夫であった。

偶然の再会から、彼女は男に手紙をだす。変わり果てたあなたに一体何があったのか、なぜかつて、我々は別れなければならなかったのか・・・

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

最初は素っ気なかった男も、かつての妻の真摯な態度に動かされ、次第に真実を語るようになる。自分が心中事件を起こした相手との過去、そして現在を淡々と語り、手紙のやり取りが続く・・・

「もう、ボロボロ泣けるよ」の友人のコメントはまさにそのとおりであった。

「俳優なら、あなた、絶対コレを読みなさい！！」のおすぎ（ピーコ？）のすすめもまた然りである。

これは独断と偏見だが、古今東西、アートで身をたてようと思った男は苦勞する時期がある。どうにもならなくて、人（女）に食わせてもらわなければならない時がある。これを踏まえると、おそらくこの辺は実話だなあと思えるシーンも出てくる。

私が大泣きしたのは、このあたりのエピソードであった。主人公である男を今食わせてくれている女性、令子がこの手紙のいきさつを見つけるところである。

おそらく実話ではないかと思わせる件である。黙々と分厚い手紙の束を読み終え、泣きながら布団を被ってつぶやく、「うち、あんたの奥さんやった人を好きや・・・」

エニウェイ、物には旬とはしりがあり、ここ数日、紅葉の北アメリカを車で爆走した私としては、遠きにある故郷、日本の錦繡を思うのであった。

4 化けて出ない生き方をする

4.1 人生で確かなこと

この理学気功を始めて数回目の施術の時であったように思う。冷えというものがどうして存在するのかと、ヒエトル先生に尋ねたことがあった。

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

人間が二足歩行をするようになった時からでしょう。動物に冷えは無いですから・・

この答えは、至極あたりまえのこととして、私にはすんなりと受け入れることができた。

私が「突き指大王」で、小学生の時は突き指ばかりしていたことは、以前ブログにも書いたと思う。ひびの入った骨は、接着剤でくっつけるのでも、ホチキスで止めなおすのでもない。医療ができるのは、自然治癒力で回復するのを待つだけなのである。

ようするに、病気というものは、自然治癒力で直すのだなあということを理解すると、自然治癒力を最大限に発揮することが、健康でいる最高の秘訣なのだということが解ってくる。

自然治癒力、自然界に存在するエネルギーは気である。気が病まないようにし、気の元を養って、陰と陽をうまく取り入れていく。この状態こそが、人間の状態の中で最も望ましい、潜在力を最大限に発揮できる状態である。

とうとつだが、オットがかつて、私に言った。

ユキ、世の中でたった一つだけ明らかなこと、確かなことがある。それは、我々は必ず死ぬ、ということ。それ以外は何ひとつ確かではないんだよ・・・

だから、不確実なことをあれこれ考えて思い悩む必要はないんだ・・・というのがオットの語りであった。

それはさておき、人は必ず死ぬのである。であるなら、限りある人生は最高の状態で満たされていることが望ましい。

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

自然の力を取り入れ、スピリトを養い、心身ともに、冷えることが無く、常に最高の状態に保っていること、これを陽気で活けてる人生と私は定義している。

この日の施術の最後にヒエトル先生が言った。

この生活をつづけていれば、まあ化けて出ることはないかなあと・・・

4.2 化けて出るといふこと

私は一瞬意味がわからなかった。

仮に死んだとしても、死んでも死にきれなくて、化けてでる・・・とかね、そんなことにはならないでしょうねえ・・・

これは非常に意味の深い言葉である。

私は今、外資系の投資銀行で働いている。

私も含め、多くの人の勤務時間は長い。多大なストレスとプレッシャーを感じている人も少なからずいる。しかし、それに見合うリワード、報酬が伴っているので、みんな続けることができる。日本の社会のように、所得を均一化し、広く搾取される仕組みではない。多くの無駄を、国民の GDP を満遍なく犠牲にすることで補ったりはしないのである。

金銭が満たされると、人は物欲にはしる。所得のケタが違う人の消費行動はみてとれる。それが、「賢い」投資かどうかというのは、また別の議論になる。

「理想のボス」というところでも触れたが、金銭的に満たされても、それでも幸せ出ない人は多い。さらなる物欲、名誉、権威、はてには、手に入ることの無い永遠の命を求めるからである。

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

これらを求めている限り、常に達成できない目標を掲げていることになる。志半ばにして逝けば、悔やんでも悔やみきれない思い、恨みつらみがのこり、結果的には、化けてでるような人生を選んだことになる。

それよりも、日々是、好日、いま死んでも化けてでない生きの方がはるかに賢いとなぜきづかないのかと思う。あたまのいい人達、エリートである人々がなぜ、きづかないのかと不思議でならない。

幸い、私はオットにめぐり合えた。

数週間でどうして恋に落ちることができるの？とか、なぜもっと良く考えなかったのか、という質問を良く受ける。

オットの瞳は、私の過去、三十数年の人生の中で、あった世界中のどの人間よりも、澄んでいて美しかった。

最初は、結婚などとても考えなかった私が、この瞳に向かって、「I can't live without you・・・」とつぶやいていた。

人はひとりで生きていくものだと言っていた私が、気づくと「あなたなしでは生きてはいけない」など、この瞳の主に向かってつぶやいていたのである。

であってまだ半年にもならないが、「この人と一緒になってよかったなあ」とおもうことは少なからずある。けれども、後悔は、いまだ一度も無い。ありがたいかぎりである。

私はこのオットにめぐり合った。

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

楽もあり、苦もある人生だけど、いま死んだとしても、化けででるほど、恨みつらみや後悔、人生に悔いがあるわけではない。それほど、日々、喜びが多かったと思う。波はあるものの、陽気でイケテル人生を知った喜びに満たされた日々が多いと思う。

唯一つは、自分の子供となる魂と会いたかったということくらいである。

これも、自分の人生を陽気でイケテルものに変えた理由のひとつである。

自分で親を選んで生まれてきたと、そう考えると、いろんなことがすんなりと受け入れられた。親との不仲も解消した。これも「毒だし」ということを身をもって体験したからである。

子供は母親の体に溜まった毒をもって、すべて引き受けて生まれてくる。だから、親は子供を愛するのだと判った。私も、この人の毒は甘んじて受け入れようと思った。だから親を思うのだと悟った。

これに気づくと、自分の子供をもつことの準備ができた。

宇宙に満ちている、多くの魂から、自分の子供になることを選んで、毒を甘んじて受け入れてくれる、わが子を心待ちにする気持ちが湧いてきた。

この子供に会えなかったなあということくらいである。あえて起こる後悔は・・・

さて、ある日の夕食時、オットがいった。

ユキ、これから僕がいうことを怒らないで、決して悲しまないで聞いて欲しい。

なんなんだろうと、私は不思議がって訪ねる。神妙な顔つきになる。

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

僕はいま、死んでもいいと思っている。

僕はいつも、着る物と食べるものには不自由しなかった。でもほとんどのブラジル人はちがう。

僕は大学に行く機会にも恵まれた。でもほとんどのブラジル人は十分な教育を受けることができない。

僕はサーフィンを習って、スケート（ボード）をやって、柔術も習うことができた。日本でプライドも見た。ほとんどのブラジル人は、こんな娯楽はできない。

僕はアムステルダムを見て、イタリアに行って、日本に来れた。ほとんどのブラジル人は生涯をブラジル以外の世界を知らずに終える。ブラジル国内ですら、知ることは難しい。ほとんどのブラジル人は国内旅行すらできないんだよ。

いま、僕には、君というツマがいて、日本に住むことができる。

ほとんどのブラジル人にとっては、生涯かなわない夢だよ。

ここまできて、私はミゲルの顔をじっと、じっと見つめる。泣きそうになるのをこらえている。

だから、だから、僕は今死んでも、何の後悔も無いよ・・・

私は翌日、会社で、工作中にもかかわらず、彼のいない生活を想像し、涙を流した。

運を育てよう！

ユキーナ・富塚・サントス

家に帰ってこの話をすると、この根っから明るいニガボン（善良な黒人）は、心配しないでベイビー、俺は、100歳以上は絶対生きるから・・・と白い歯をザッと見せて笑った。